

星への憧れを追いかけ続ける

—42億光年先の銀河を捉え—

肉眼では見ることのできない、遥か遠くに輝く星空。その天体に魅せられ、銀河撮影のために巨大な望遠鏡までも自作した男が前岡 理照だ。重量100kgを優に超える機材とともに、闇夜の山頂へと進んでいく。生涯撮り尽くすことの叶わぬ星空を目指して。

前岡 理照

(ISO中部支部 支部長)

天体撮影を始めたきっかけ

小学校の授業でプラネタリウムを見に行ったのがきっかけで、星を好きになりました。ただそれよりも前に、幼稚園の弟が持って帰ってきたカラー副読本の表紙に「プレアデス星団」の写真があり、印象深く記憶に残っています。その出会いが原点なのかもしれません。



プレアデス星団(撮影:前岡)

望遠鏡撮影の醍醐味

望遠鏡を使っただけの楽しみ方は、目で星を見る方法と、デジタルカメラで写真を撮る方法などがあります。私は写真専門です。肉眼では見えない星まで写し撮ることができる、それに尽きます。遠くの銀河を中心に狙っていて、その光にロマンを感じています。望遠鏡は、狙う対象によって形やサイズがあり、いくつかの望遠鏡を買い足したりもしていました。それに満足しなかった私は、工作好きということもあり、より遠くの銀河撮影用に巨大な望遠鏡を自作してしまいました。そういう機材の工夫や選択も楽しみの1つで、仲間内では機材沼(底なし沼)と呼んでいます。



自作の巨大望遠鏡

撮影の際に行く場所

星の写真を撮るには、星が綺麗に見えるところではないといけません。そのため、星が綺麗に観測できる場所へ望遠鏡を持って遠征します。行き先は山の上が多いです。機材は全部で100kgを軽く超えるので、車で上まで登れ、広い駐車場があるようなところになります。月明かりは撮影の邪魔となるため、週末、晴れて月がない夜となると、年間10回に満たないくらいです。それを解消すべく、和歌山県南部の空が暗く星が綺麗に見える場所に、星友達と観測小屋をDIYで建設しました。星の撮影を行う人の中では、暗黒地にリモート観測小屋を建て、都会から撮影を行うのがトレンドとなっています。その結果、格段に撮影機会が増え、撮影しまくりといった状況です。



アンドロメダ銀河(撮影:前岡)

自身にとって望遠鏡撮影とは

趣味を超えた存在になっています。撮影だけでなく、金属加工からはんだ付け作業まで、何でもこなすようになりました。子どものころからの、星への憧れを追いかけ続ける手段でもあります。

今後の目標や展望、野望

撮影の対象は、文字どおり星の数ほどあります。撮り尽くすことはないでしょう。少しでも多く、遠くの存在に近づくために撮り続けたいと思っています。稼働し始めたリモート観測所をフルに活用し、天文雑誌の読者写真に掲載されるような写真を撮りたいと期待を膨らませています。